巴里でした正月

兩腕を伸ばして欠伸をした拍子にマンテルピースの上の時計を見ると、夕暮のやうだがまだ三時だ。今頃京都は四條通がおけら詣りで賑ふ頃かなと思ふ、勿論時差を勘定しての考へだ。チョロ〳〵燃える暖爐の火を、見るともなしにぼんやり見て居る内に、下駄ばきの二重廻しや、背中に段を作つた女の姿や、くすぼる火繩や、四條の大橋や、自家のものや、大きな聲でわめきまわる前の家の氣狂までが、頭の中を去來する。

『今夜は外に出て除夜の様子でも見て來るかな』

と相住居のSが隣の部屋から叫ぶ、これも讀みさしの本を横に、煙草でも吹かして居るらしい。

『何か變つたことでもあるのかね』

と聞くと、別に何もないといふ、それでは寒いのに態々出かけるにも及ぶまいとの思案をきめる。後で聞くと勿論格別の事もないが、それでも歳末年始の氣分は相當に人の心を動かすものと見えて、常にも人のこむ大通りなどはそゞろ歩きの人で充たされてしまふのださうだ。

近く日本から巴里に來たTと、更に近くついたXとが、格別深い知り合ひでもないのに妙な工合で打ちつれて當夜の光景を見に出かけたさうだ、マデレンのお寺からリシュリューの通りまで、オペラを中にして大並木通り十町